

平成 2 6 年 6 月 1 6 日現在

機関番号 : 2 6 4 0 1

研究種目 : 若手研究(B)

研究期間 : 2012 ~ 2013

課題番号 : 2 4 7 3 0 4 6 8

研究課題名 (和文) 介護支援専門員によるインフォーマル・サポート活用の支援プロセスに関する研究

研究課題名 (英文) A study on the use of informal support processes by care managers

研究代表者

橋本 力 (HASHIMOTO, CHIKARA)

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号 : 0 0 6 1 2 0 1 1

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 300,000 円、(間接経費) 90,000 円

研究成果の概要 (和文) : 本研究の目的は、介護支援専門員によるインフォーマル・サポートの活用について、その支援プロセスを明らかにすることであった。

面接調査からは、介護支援専門員が要介護者の支援時において、特に家族を重要なサポーターと捉えていることが明らかになった。また、家族から支援の協力を得る際には、アセスメントの際の家族に関する情報把握、ケアプランの作成時における家族調整、モニタリングにおける家族の状況確認、ケアカンファレンスにおける家族の参加など、ケアマネジメント実践の過程を経ていることに加え、家族の介護負担に十分配慮すること、および家族との信頼関係の構築を重要視していることなどが明らかになった。

研究成果の概要 (英文) : The purpose of this study was to clarify the use of informal support processes by care managers.

As a result of an interview survey, it was clarified that care managers are regarded as a significant source of support for the families in particular, even in informal support. Moreover, it was clarified that when care managers obtain cooperation of support from the families, the following points are regarded as important: 1) Experiencing the process of care management practice including i) understanding information concerning the families during the assessment; ii) family adjustment when creating care plans; iii) confirmation of the families' situation in monitoring; iv) participation of families in care conferences; 2) Considering the families' care burden sufficiently; and 3) Building a trust relationship with the families.

研究分野 : 社会科学

科研費の分科・細目 : 社会学・社会福祉学

キーワード : ケアマネジメント インフォーマル・サポート 介護支援専門員

1. 研究開始当初の背景

介護保険法において明記されている介護支援専門員による要援護者へのサービスの連絡調整は、ケアマネジメントに基づいている。白澤(1992)は、ケアマネジメントにおいて調整する社会資源としてフォーマル・サービスに加え、家族、近隣・友人、ボランティアなどのインフォーマル・サポートも社会資源として位置付けている。これまで橋本らは、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関する情報把握の現状、およびインフォーマル・サポート活用の現状について明らかにすることを目的に、介護支援専門員を対象とした量的調査を実施した。その結果、介護支援専門員は、家族、友人、近隣、地域のボランティア等といったインフォーマル・サポートの中でも、家族について最も情報把握を行い(橋本ほか 2008)、また支援時において家族から最も支援の協力を得ている(橋本 2011)ことが明らかになった。しかし、橋本らが行った調査では、インフォーマル・サポートに関する活用の現状については明らかにされたものの、インフォーマル・サポートが、どのような特性やニーズを持つ要援護者において必要となり、またその支援はどのように展開されるのかなどの支援プロセスについての検証はなされていなかった。白澤(1999)は、ニーズ優先アプローチの視点から、ケアプランの作成においては、利用するサービスに先立ち、要援護者のニーズの検討がなされるとし、そのニーズに基づいてフォーマルなサービス、インフォーマルな支援を合わせた社会資源が求められることを指摘している。

要援護者のニーズは多様化しており、介護支援専門員は、今後さらに要援護者のニーズに基づいた多様性のある支援を行っていくことが必要である。その際、インフォーマル・サポートの活用においても、インフォーマル・サポートを必要とする要援護者の特性

やニーズに着目し、その支援プロセスについて検討を重ねていくことが求められる。そこで、本研究ではどのようなニーズや特性を持つ要援護者がインフォーマル・サポートを必要とし、またインフォーマル・サポートの活用が実際の支援においてどのように展開されるのか、その支援プロセスを明らかにし、検討を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究では、介護支援専門員への面接調査をもとに、以下の点について明らかにすることを目的とした。(1) インフォーマル・サポートがどのような特性を有する要援護者において、より必要となるのかを明らかにする。(2) 介護支援専門員が、インフォーマル・サポートを活用する際の支援プロセスについて明らかにする。以上の点を明確にした上で、介護支援専門員によるインフォーマル・サポート活用のあり方および課題について提言を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、介護支援専門員を対象に面接調査を行うこととした。面接調査は、事前にインタビューガイドを作成し、半構造化面接で行うこととした。

介護支援専門員に対する面接調査は、分析結果に基づき、一定の理論飽和化を確認するまで、適宜行っていくこととした。

4. 研究成果

本研究では9名の介護支援専門員に面接調査を実施した。本研究の目的の一つは、インフォーマル・サポートが必要となる要援護者の特性を明らかにすることであった。面接調査からは、認知症高齢者や独居高齢者など、在宅生活において多くの支援を必要とする要援護者に対し、介護支援専門員がインフォーマル・サポートの必要性を感じていることが明らかになった。その理由として、多様なニーズを有する要援護者の在宅生活を支え

るには、介護保険制度内のサービスのみでは限界があり、制度内のサービスでは対応しきれない支援や時間帯においてインフォーマル・サポートが必要となるなどといったことが挙げられた。

さらに、介護支援専門員は、インフォーマル・サポートの中でも、特に家族を重要なサポーターと捉えていることが明らかになった。面接調査からは、家族は、要援護者にとって近い存在であること、家族からの愛情が要援護者の生活において重要であること、良い関係性が築けている状態での家族からの支援は要援護者にとって満足感が高いこと、家族は、要援護者にとっての拠り所であることなどが聞かれた。その反面、支援の協力を得るにあたって、要援護者と家族の関係性が影響することや家族が抱える介護負担に配慮する必要性があることなど、家族から支援の協力を得る際の留意点も挙げられた。また、近隣や友人といったサポート源については、見守りや安否確認など、負担のかからない程度の依頼が重要であることなどが聞かれた。さらに、これらの支援は、要援護者がこれまでの生活において築きあげてきた近隣との関係性が大きく影響するとの意見も聞かれた。民生委員については、地域の情報を教えてもらうなど、情報源として機能していることなどが聞かれた。しかし、民生委員によって地域とのつながりに差があるなどの現状も挙げられた。地域のボランティアについては、介護保険制度が対象とする要援護者に対し、そのニーズに対応できるボランティアが地域に多くはないなどの課題が聞かれた。

次に、介護支援専門員が、インフォーマル・サポートの中でも、重要なサポート源として捉えていた家族に関して、その活用プロセスを分析することとした。面接調査の結果、介護支援専門員は、アセスメントの際の家族に関する情報把握、ケアプランの作成時における家族調整、モニタリングにおける家族の

状況確認、ケアカンファレンスにおける家族の参加など、ケアマネジメント実践の過程を経て、家族から支援の協力を得ていることが明らかになった。さらに、介護支援専門員は、家族から支援の協力を得るにあたって、家族の介護負担に十分配慮することや家族との信頼関係の構築を重要視していることなどが明らかになった。

以上の研究結果をもとに、介護支援専門員によるインフォーマル・サポート活用に関する留意点について提言を行う。

本研究結果からは、介護支援専門員が、認知症高齢者や独居高齢者など在宅生活において多様な支援を必要とする要援護者に対し、インフォーマル・サポートの必要性を感じていることが明らかになった。介護支援専門員は、多様な支援を必要とする要援護者に関しては、要援護者のニーズを明確にしたうえで、介護保険制度内のサービスのみではなく、インフォーマル・サポートについても、その活用の可能性について検討を行っていくことが必要である。その際、介護支援専門員は、家族、近隣、友人、民生委員、ボランティアなど各インフォーマル・サポートの特徴を理解しておくことが必要である。本研究からは、各インフォーマル・サポートの特徴として、家族については、要援護者の生活に最も近い存在であることや、要援護者と良い関係性にある家族からの支援は、要援護者にとって満足感の高いものであることなどが聞かれた。介護支援専門員は、家族が、要援護者の生活において重要なサポーターであることを認識することが求められる。また、近隣、友人に関しては、見守りや安否確認など負担のかからない支援などにおいて、その活用の可能性を検討していくことが求められる。しかし、家族および近隣、友人に対し、支援の協力を依頼する際は、その内容が過剰な負担とならないよう十分な配慮が必要となる。民生委員については、地域の情報源と

して、必要に応じてつながりをもっておくことが有効であると考えられる。

また、介護支援専門員は、インフォーマル・サポートの活用において、そのプロセスに留意していく必要がある。本研究からは、介護支援専門員が、インフォーマル・サポートの中でも、家族を要援護者にとって重要なサポーターと捉えていることが明らかになった。さらに、介護支援専門員は、家族から支援の協力を得る際に、ケアマネジメント実践の過程に基づき、その各段階において家族に対し配慮を行っていることが明らかになった。このことより、介護支援専門員は、家族から支援の協力を得る際は、アセスメントの段階において、家族の介護状況や介護負担、また要援護者と家族の関係性などを明確に把握することが求められる。また、ケアプランの作成やケアカンファレンスにおいても、家族の参加を促し、協働で支援の方向性を模索していくことが必要であろう。さらに、本研究では、介護支援専門員は、家族から支援の協力を得るにあたって、家族の介護負担に十分配慮することや家族との信頼関係の構築を重要視していることなどが明らかになった。介護支援専門員は、家族に寄り添い、信頼関係を構築しながら、家族の介護負担が過剰にならないよう十分な配慮を行っていくことが必要である。その上で、支援の協力について、家族とともに検討していくことが求められる。

最後に本研究の今後の課題について述べる。本研究の今後の課題として、地域特性の違いにも配慮した調査が必要である。本研究では、介護支援専門員によるボランティアの活用については、多くは聞くことができなかった。介護支援専門員がボランティアを効果的に活用するには、その地域におけるボランティアの量および質的な側面の充実が必要となる。今後においては、地域におけるボランティアの充足状況など地域特性にも配慮

した調査を行っていくことが課題となる。さらに、今後の課題として、本研究結果をもとに、より一般化できるインフォーマル・サポート活用のプロセスモデルについて検証を行う必要がある。本研究では、面接調査をもとに、9名の介護支援専門員を対象に調査を行ったが、その結果は、探索的な段階にあるといえる。今後においては、本研究で明らかとなった結果をもとに、介護支援専門員に求められるインフォーマル・サポート活用のプロセスについて、より一般化できるモデルを検証していくことが必要である。その際、統計的分析を用いた量的研究を行うことにより、インフォーマル・サポート活用のプロセスモデルについて、その妥当性および信頼性を検証していく必要がある。

最後に、本研究では、当初、研究成果を論文として整理し、報告を行っていくことを予定していた。しかし、本研究の面接調査が終了したのは、調査最終年度の3月末であり、論文としての整理は、現在も継続中である。今後においては、本研究結果のより詳細な内容を、論文において整理し、報告を行っていく予定である。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

6．研究組織

(1)研究代表者

橋本 力 (HASHIMOTO CHIKARA)

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：00612011